

連載

あぁ、猪猟泣き笑い

その15年を振り返り

川崎市

田宮 治

色んなことがありました…



9 ある猟場で起きた事件(1)

●伝えたい単独猟の極意

平成18年1月8日。この日の出
猟は、もちろん猟果も大事だが、
わが猟友2人に猪猟、つまり、実
戦での犬群の引き込みや、山のど
の辺りを、どのように狩り進むか
：などを教えてあげたいと考え、
10年以上も通い続けている群馬県
のS地区近くの狩場に入ってみる
ことにした。

ここは、私が開拓した中でも良
い狩場で、寝屋場もイノシシが逃
げる方向も知り尽くしており、今
回のような場合には好条件が揃っ
ている。ただ、ここを本拠地にし
ている地元グループは、かなり
排他的なところがあり、その言動
(暴拳・暴言と言っても過言では
ない)に脅され、泣かされること
もしばしばであった。

S地区と隣り合わせのM村の猪
猟のグループについては、以前本
誌でM氏が紹介されていたが、グ
ループ皆が立派な考えを持ち、素
晴らしい猟をされている。私は、
そのグループのI氏がクマ9頭を
獲った年に電話で親しく猟談した
こともあり、また、氏の知人(老
夫婦)の営む民宿に妻と孫の3人
で泊めていただき、何度か猟を楽

しんだこともある。

同じ地域にある2つのグループ
で、なぜこのように考えや、狩場
行動が変わっているのか不思議で
ならない。人間は、いや、私だけ
かも知れないが、「どうぞ、私達の
山へ遊びに来てください」と言わ
れれば、何となく入山するのに気
が引けるが、「俺達の山だから入
るな。犬がどうなっても知らない
ぞ」と、脅されたり意地悪される
と、「何を言っているのだ。私は
免許を持っているし、あなた達に
とやかく言われる筋合いはない」
となるのが普通ではないだろうか。
この猟場は、私とそのグループ
が角突き合わせるほど良い猟場な
のだ。それゆえ私は、山入りに際
しては、農地の所有者や山仕事を
している人の承諾を得て、細心の
注意を払いながら猟を続けてきた。
反目するグループのこともあるが、
2人を連れて行くからには、日曜
日ということもあり、まずは一番
乗りが条件であった。

猟場に着くと、いつもの場所に
全犬を繋ぎ、ゆっくりと準備にか
かった。例のグループが来ること
も考えて食事も済ませたが、幸い、
入猟者(グループ)はまだ誰も居な
い。今日、このような形で入猟す

るからには、私がこれまで体験してきたことの全てを披露し、「田宮流単独猟の極意」(大袈裟かも知れないが)に加え、多少なりとも、私自身の生き様を感じ取ってもらえればと思っていた。

たかが「猪猟」であるが、人様に教えるからには、犬の引き込み↓イノシシの追い込み↓射獲：までの猟法はもちろん、「狩猟道徳」の何たるかを理解してもらえないような指導でなければならぬ。良い「猟道」の流れが後世に引き継がれて行くことを信じ、今日を大事に過ごそうと心に決めていた。

●何がおいしい

私は、同行の2人に気持ちよく猟をしてもらうために、時間をかけて入念に準備し、他の入猟者が居ないことを確認しつつ、予め2人にこの山の様子、イノシシの寝屋、イノシシが跳ぶ方向、犬群の導き方などを説明した。そして、いつものように、その場から放犬した。「富士雄号」「クマ号」「ブル号」の3頭を先頭に、皆良い動きを見せている。

この4週間、イノシシを獲り続け、そのたびに犬群は調子を上げてきている。昨日の大猪との激闘

などなかったかのように、疲れも見せぬ犬群の元気な小気味良い狩り込みだ。

放犬後、すぐに畑の上で起こすこともあるが、今日は山の様子が変わっている。小スギ混じりの雑木林の下草まで綺麗に刈り取られ、スギ林はどこまでも見渡せる。ここにイノシシは居ない。そして、次の寝屋場にもイノシシの姿はなく、そこを素通りして大スギ林を登って小峰に出た。ここが、今日一番のきつい登りである。

「もうすぐ楽になりますから…」と、2人を元気づけながら登って来た。2人は汗を拭き拭き、「こんな所を登るのかよ」といった顔だ。そこで、ドリンクを飲みながら小休止となった。私は、腰を下ろした場所から見渡せる一番高い峰を指差し、その山の表と裏の山並みを2人に説明した。

これから狩り進む山の裏から始まる6カ所の寝屋を、一つひとつ潰しながらUターンして、車の所まで戻る：いつもの作戦である。一番目のポイントには、山の裏側八合目の獣道伝いに上から攻めるのであるが、犬群を呼び戻し私の愛犬達は、それほど呼ばなくても休んでいると戻って来る、静か

に寝屋の上引き込むのである。単独猟では、犬群が離れないように、静かに主人の見える範囲に置くことが大切である。そして、ここぞと思う寝屋場では、即座にイノシシの逃げ道を判断して、どの方向から攻めるかを決め、犬群にその方向を示して的確に引き込むのである。この判断が「獲れる」「逃げられる」の分かれ目になってくる。

どんな山でも忘れてならないのは、寝屋場からイノシシの跳ぶ方向を確実に見極めることであり、特に単独猟では、イノシシが跳ぶであろう状況・方向を読み、「あの辺りで止めて撃ち獲れる」という判断で狩り込む。私の経験では、どんな猪山でも、八合目から六合目辺りに、イノシシが苦勞せず横切れる獣道があるものだ。

このような獣道伝いに、イノシシの寝屋場を攻め続け、元の放犬場所(車の所)に戻るように狩り込んで行く：ことを2人に何度も説明する。そうした中で、イノシシの寝屋場についても、実際に現地で寝屋を見せ、「こういう所以外には寝ていません」と付け加えた。まさに、百聞は一見に如かず：である。イノシシの寝屋は、どこか

ら攻められても逃げる事ができる出峰の辺りで、下草のある雑木林などにある。

やがて私達は、この日期待していた場所に近づいた。そこは岩場で、犬が上の寝屋で起こすと、イノシシは下の小道伝いに窪みを越えて逃げる。私は、かつて次々に4頭を撃ち獲った場所に立ち、「あそこを走るのです」と指差した。「いい所ですね。あそこ以外は跳べないね」と、Kさんが感心したようにその場所を見ている。

だが、期待したその場所にもイノシシは入っていないかった。「お



この猟果の翌日の出猟での出来事。K氏(左)と筆者と「ブル号」

かしいなあ、畑に掘り跡があったのに……」などと話しながら、両側が馬の背のように切り立った小峰を登り、三番目の寝屋に近づいた。ここは、4年ほど前に130kgの大猪を射止めた場所である。あとのまにそのまま残っている横に倒れた木に銃を添え、「あそこで仕留めたんですよ」と、2人に沢底の窪地を見せらう。今、犬群が入っている雑木林の藪にイノシシが寝ていれば、必ず沢の窪地に追いつき落とされて止まるので、ここから狙うのがちょうどよい。過去に撃ち獲ったイノシシと、犬達のことを思い出しながら、そのときの状況・様子を2人に詳しく話して聞かせた。

しかし今日は、山全体が前年までは全く違い、どこへ行っても下草が綺麗に刈り取られている。

突然、残土が積み上げられた広い場所に出た。ブルドーザーにかきむしられたように、赤土がむき出しになった道がそこかしこにあり、荒れた様子はこれまでの猪山ではなかった。私は、ただただ呆然とした。

そう言えば、もめ事が嫌で、今猟期この山に入るのは今日が初めてだった。「おかしくなってるね」

と言うのが精一杯だった。これでは、この寝屋もダメである。この日の目的の一つに「必ずイノシシを獲る」があり、今日2人の目の前で「起こること」「起きたこと」を実体験として、単独猪猟を学んでほしい……と思っていたのに、これでは疲れるばかりではないか。

犬群の狩り込みの善し悪しにしても、初めての狩人では見当もつかないだろう。2人に実際に獲ってもらわなければ、私の昔の自慢話に終わってしまう。はてさて、どうしたものか。

●最後の決め手は？

すっかり変わり果て、ただ見通しだけが良くなった高場に立ったまま、私達3人は喉を潤し、少しばかりの食を摂った。その間も、私は考えを集中させ、何とかしなければ……と思いあぐねていた。

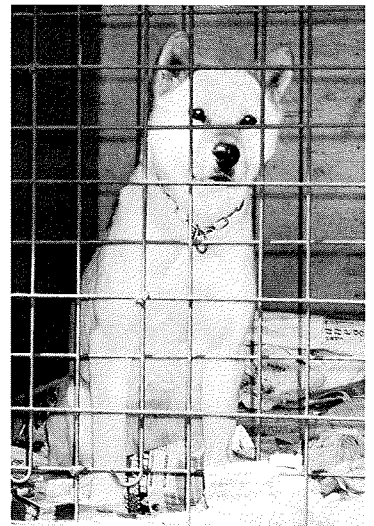
こんなときに一番大切なことは、月並みではあるが「根性」だと思っている。どのような逆境にあっても、決して諦めずに挑み続ける精神力、それが「根性」であり、気持ちで負けたらイノシシを獲ることなどできない。

「よし、行きますぞ」と2人に声をかけ、「よし、よし」と大声

で犬群に元気を送る。次は、本日の「ターニングポイント」とも言うべき場所であり、イノシシが入ってさえいれば、必ず寝ているのだが、また一番逃げやすい(逃げられやすい)場所でもある。

そのことと、なぜ裏から攻めるのかを2人に詳しく説明し、小峰を用心しながら登り、この山の一番高い所に出た。そこは三角点で、三方に大峰が下りているが、その大峰の右の一方をイノシシに越えられないように、十分注意するように2人に告げた。右に切られた場合は、イノシシのいつもの逃げ道であり、その先に続く岩場に行かれたらどうしようもない。

私は、2人に「今日、一番の寝屋です。必ず寝ているから……」と言って勇気づけた。犬群は、すでにイノシシを感じし、動きも急に変わり、頂上に登り詰める辺りから全犬の姿が見えなくなった。私は、いつもの寝屋場に狙いをつけ、Kさんに「右の大峰を駆け下り、イノシシの逃げ道を断つように」と告げ、その後続いた。



体形の仕上げの切り札「咲号」

ここさえ切れずに逃げ道を断てば、後は間違いなく犬群が下の谷に落とすだろう。……そう思った瞬間、湧き上がる犬群の鳴き声が聞こえた。岩場の、見通しの良い寝屋のために寄せ鳴きはなく、一気に絡みながらの追い鳴きである。すぐ近くなので、まるで山が割れるようだ。イノシシはと言えば、さすがに追われ慣れた大物らしく早立ちしていた。

そして次の瞬間、イノシシは、あつと言う間に3人の一番前を横切った。その後を犬群が団子になって、これまた瞬く間に右下に落ちて行った。もうもうと土煙が上がる。絡み鳴きがどんどん遠くなっていく。イノシシが急坂で突然方向を変え、犬群をかわしているらしく、すぐ下の谷には落ちずに、やはり岩場の方向へ逃れるようだ。



まさしく一流芸の「富士雄号」

あれほど注意して裏から登り、しかもKさんに右尾根を急いで下るように指示し、万全の対策を講じたのに、その先を見事に切られたのである。このとき私は、野に生きた大猪の凄まじさを思い知らされた。一番行かせたくない難所に、またしても逃がしてしまった。まさに残念無念であった。

鳴きながら咬み込もうとする犬達の跳ばされる姿がチラッと見えたが、先頭を行く獺友もKさんもあつと言う間の出来事で銃を構えることもできなかった。イノシシも跳ぶ気でこのような急斜面を逃げるときは、立林や草木などもあり、並の者ではとても撃ち獲ることはできない。今回は、撃つのは無も犬群が付いていて、撃つのは無

理だった。Kさんには、迎え撃ちか谷止めで、ゆっくり撃ってもらおうと思つたのに……

気を取り直し、今度は二方向に分かれて犬群の後を走って追つた。鳴き声は、止まつては走り……を繰り返しながら、どんどん岩場のほうへ遠ざかり、断崖下の辺りで聞こえなくなつた。やはり、あそこに逃げ込んだか。それにしても、とにかくひどい場所だ。私一人のときは、そこに逃げられたら勝ち目はなく、覗き込むだけだった。そんな失敗を重ねているからこそ、前述の手順で下の沢に追い落とす作戦を立てたのだつた。

かつて、この作戦で二度成功しているの、柳の下の3匹目のドジョウ：ならぬイノシシを狙つた

のだが、敵もさるもの、この作戦を読んでいたかのような鮮やかな逃げっぷりだった。

いつしか私達は、3人一緒になつていた。滑り落ちないように下草をつかみ、足場を選びながら必死に犬達を追つた。急斜面のため、下りられる場所も限られており、小峰伝いにやつと下りられる状況の中で、注意しながら進んだ。すでに1時間近く経っているが、無線に入る犬群の声はまだまだ元気で、止めているようだ。岩場を横切つて近づいてはまた離れる……の繰り返しか。場所が悪く、きつちり止めきれないでいる。

私達は、山の上から下の沢まで一直線に切り立つた絶壁の近くまで来た。だが、そこからはとても近寄れない。犬達は二手に分かれたようで、「富士雄号」と「サクラ号」の音信が無線から消えた。「ブル号」「ラン号」「クマ号」「ゲン号」がやつと止めたようで、無線の声動かなくなった。

3人は、最後の力を振り絞って近寄ろうとしたが、これ以上は危険すぎる。犬達は、向かい合つて攻防しているようで、少しずつ動いている。仕方なく、足場を選びながらやつと畑のある所に出た。

この畑は、下の沢伝いにイノシシを追つて下の集落から入つたことのある場所である。小道を辿り、やつと犬達のすぐ下に着いたが、どのように試みても近づくことができない。

二手に分かれて、挟み込むように「ブル号」の無線に忍び寄ろうとするが、切り立つ絶壁の上で、すぐ傍なのに姿が見えない。回り込む所もない。「残念だが、これまで」とKさんに告げ、大声で「ブル号」を呼び戻し、その場を離れることにした。これ以上ここに留まつては、犬達も危険だ。だが、「クマ号」達も私の接近に気づいているようで元気づき、なかなか戻らない。

3人は、畑の傍の日当たりの良い場所が遅めの昼食にした。さすがに2人は疲れた様子で、「帰りはどうするのですか？」と心配そうだった。犬達は、まだ戻って来ない。Kさんが「集落に出て、道伝いに車を回しましょうか？」と申し出てくれたが、道は大きく山を回り込んでいて、車でも20分ほどかかるので、歩いてはとも無理だと告げた。

おにぎりを頬張りながら、そんな話をしてると、やつと「クマ



最高のコンビの「富士雄号」と「サクラ号」

号」と「ラン号」が帰って来た。

2頭におにぎりを分け与え、「ダメだったか、よしよし」と撫でてやる。食べ終わった2頭は、また「行こう」と私を誘うが、私は引き綱を付けた。そのとき、獵人と思われる2人が軽トラックでゆっくり入って来た。私が道から「ラン号」をどけ、挨拶しても何も言わずに、何かを調べているように私達を見ながら、ゆっくり帰って行った。

私は2人に「大変だけど、峠道があるので、そこを越えて車に戻りましょう」言い、歩き出した。すると、「ゲン号」と「ブル号」が

戻って来た。しかし、「富士雄号」と「サクラ号」は相変わらず無線も入らない。おかしい、こんなことはいはずだが:

心配かけないように、2人には「きつと、車に戻っていますよ」と言ったが、内心では「帰りの良い2頭だ。何かあったのかも知れない。無線に入らないほど遠くに行くとは考えられない。おかしい」と心配になっていた。2人は、昨日「富士雄号」と「サクラ号」の素晴らしい猟芸を見ているので、「そうだよ」と納得した。

●そして、事件は起きた

3人は、疲れ切った重たい足を引きずりながらゆっくり登り、やっと頂上に着いて立ち止まった。その時である。突然、「富士雄号」の無線に「犬を捕まえた。このまま帰ります」と、驚いたような大きな声が入った。

私達は「何だ、これは？」と顔を見合わせた。まさか「富士雄号」を捕まえた」ということではないだろうと思ったので、「ほかのグループが入っていたのですね。そのグループの犬を捕まえた」と言っているのかも知れませんが」と言うと、2人は「そうかなあ」と

いうことで、その場は終わった。

私は急に心配になり、「富士雄号」に異変が起こったことを認めざるを得なかった。なぜなら、ここは峠の頂上である。この下の車に「富士雄号」達が帰っていれば、もう無線に入っているはずである。つまり、ここから無線の届く範囲には2頭は居ないということである。こうなったら、一刻も早く車に戻り、2頭を探さなければ。

車までの戻り道。道沿いのスギ林も、下草は全て刈り取られ、以前とは全く異なる山に感じられた。先ほどのイノシシが追い落とされはすだつた谷も、今は丸裸の状態だ。これではイノシシが逃げ落ちるわけがない。やはり、イノシシが逃げるのは、あの岩場しかない:ことを納得させられた。今後はこの上、つまり、さらに高い山並みを狩らなければダメだ。とは言え、道の両側にはイノシシの掘り跡があちこちにあるのが確認できた。やっと車にたどり着いた。

「富士雄号」と「サクラ号」の姿は、やはりそこにはなかった。さらに不安は募る。「やはり、おかしい。あのグループだ」と、不安は確信に変わっていた。苛立つ気持ちを抑え平静を装う。私達は、

2台の車で2頭の捜索を始めた。先ほどイノシシを止めた場所まで戻り、そこを起点に行っては戻り:を繰り返す。だが、どこを探しても無線には入らない。

それでもグルッと回り、反対側の道に着いたときである。「サクラ号」の無線が急に入り出した。「ああ、よかった。サクラが居る」私はほっとして、無線を頼りに近づいた。居た居た。道の傍らで「サクラ号」が私の車が近づくのを待っていた。そこは、先ほど「クマ号」達を引き連れて、沢から小峰伝いに歩いてこの道に出て、そこから300mほど歩き、左に登る峠までの小道に入った所である。

「サクラ号」は、ここまで沢伝いに私達を追って来たが、車道に出るのをためらい、ここで待っていたのである。車を降りて「サクラ、サクラ」と大声で呼ぶと、全身を震わせて喜び、盛んに尻尾を振って寄って来た。「どこに行っていたのサクラ? よしよし、よくやったね」と、私は全身を撫でてやった。

そして、「サクラ号」を車に乗せようとしたそのときである。新たな事態が私達を襲おうとしていた。(つづく)